

医 論



婦人科肝病の弁証論治についての経験

肝は木に属し、風を主り、体は陰であり用は陽（血をもって体となし、気をもって用となす）であり、水から生まれ土に育てられる。また肝は蔵血の臓であり、条達を好む性質があり、情志と深く関わっている。

『素問』靈蘭秘典論篇は肝について「肝とは將軍の官にして、謀慮ここより出ず」と述べているが、謀慮とは思惟機能のことであり、精神機能に関わる作用である。したがってたとえば気持ちさが塞ぎ込めば気機が滞り、気が鬱滞すれば血も滞るので、あらゆる疾病が発生することになる。特に女性についてはその傾向が顕著であり、それは女性にとって血が最も重要な要素だからである。そして肝は血臓であり、衝任血海との関わりが強いので、肝経の気血に伸びやかさが失われれば、衝任を損って、月経・帯下・妊娠・出産に関するさまざまな疾病を発生させる。

秦天一しんてんいつがこう述べている。「葉先生の医案をみると、奇経八脈はもちろん枢軸であるが、その最も重要な機能は、肝を調節することである。肝は女性の先天であり、陰性なので、凝結して鬱滞しやすい。すると気が滞って、血もまた滞る」。また『馮塘医話』は「女性は思い悩んでうつになりやすく、……肝経が病めば、月経が不調になって、子供ができにくくなる」といっている。また劉河間りゅうかかんや王肯堂おうこうどうによれば、天癸が至れば厥陰病を病むという説もある。いずれもが、婦人病における肝病の重要性を説明している。

そこで、ここでは肝病の病機を研究し、症状を分析し、治療法則を帰納し、方薬を紹介し、参考に供したいと思う。

1 肝病のメカニズム

肝は筋を主り、目に開竅し、その華は爪にある。また肝は、血をもって

体となし気をもって用となす。肝には胆が付属し、その経絡はまず足の母趾の三毛に始まり、股の内側をめぐって陰毛に入る。次に陰器の周りをめぐって少腹に上り、肝臓に属して胆腑に連絡する。さらに上昇して横隔膜を貫き、胸部部に分布し、乳頭を統轄し、目に連絡し、頭頂部で督脈と会合する。

このように肝経は陰部の周囲をめぐって少腹部の両側から上昇するので、小腹部に集まる奇経八脈とは、相互に影響し合う。また肝は女性の先天であるという言い方があるが、これは肝が女性の発育と生殖に携わること指摘した説である。また肝は乳頭部を管轄しているので、乳房部の疾患も肝経に関わっている。

婦人科における肝病は、虚と実の2種類に分類することができる。実証の場合、精神的刺激により肝気が横逆し、月経時の腹痛・胸悶・脇部の脹り・乳房部の脹痛・不妊症などの症状を引き起こす。また肝鬱気滞からも月経不順が起き、肝気が上逆すれば、代償性月経や産婦の乳汁漏出症を招く。情志の失調や気の鬱滞に痰を伴えば梅核気を形成し、気が心に上逆すれば臆躁になる。また肝は蔵血の臓であるので、肝陰が不足して肝陽が亢進すれば、妊娠しても胎児を育てられず、子煩〔妊娠時の心中煩悶〕などの症状が現れる。肝が潤いを失うと、陽亢となり火を煽動して体内に風を生じ、それが頭頂部に上逆して、子癩〔妊娠癩証〕などの重篤な症状を引き起こす。また寒邪が肝経に停滞すれば、腹痛や疝気を引き起こす。

虚証では、肝陰不足から衝任が虚損し、稀発月経や過少月経などの症状が現れる。

2 婦人科肝病の弁証論治

月経不順は、精神的刺激などを契機として起きた肝鬱が原因となり、気が乱れ、気血の伸びやかさが失われて衝任が損傷されて起こる。症状は、月経が早くなったり遅くなったりする・出血量が多くなったり少なくなっ

たりする・経血の色が濃くなったり薄くなったりする・情緒不安定・胸悶・脇脹・食欲不振・舌質紅・苔白・脈細弦などである。これらは肝鬱血虚の証であり、脾の運化作用も失調する。治法としては、肝気を疏泄し、養血健脾する。『太平惠民和劑局方』の逍遙散（柴胡・当帰・白芍・白朮・茯苓・炙甘草・煨姜・薄荷）に、合歡皮・緑萼梅などを加える。

3 婦人科調肝方の応用

成方の調肝方〔調肝作用をもつ方剤〕は非常に多いので、ここでは肝鬱を治療する方剤と肝陰を補う方剤の2種類のうち、婦人科で常用されるものを簡単に紹介し、その応用方法を説明する。その他のものについてはそこから類推できるので、詳細は省略する。

肝鬱から発生した月経不順に最も多く使われるのは、逍遙散である。従来の方剤の中で逍遙散と名づけられたものには、4種類ある。現在婦人科においては、『太平惠民和劑局方』の逍遙散を採用している。この処方（当帰・白芍で養血柔肝し、白朮・茯苓・甘草で健脾和中し、清らかな芳香と流動させる性質をもつ柴胡で気滞を通じさせて肝木鬱を除いて伸びやかにし、少量の煨姜と薄荷を組み合わせる）は、肝鬱血虚や脾の運化作用の失調から起きた月経不順・月経時腹痛・不妊症などに適用され、補うだけでなく食欲を増進させる。また肝鬱血虚には火旺を伴うことが多く、頻発月経や産後の乳汁漏出などを引き起こすことがある。そのときには、上記の処方に牡丹皮・焦梔子を加えて（丹梔逍遙散）治療する。血虚で月経不順から無月経に発展した者には、熟地黄を加える（黒逍遙散）。傳青主などは、この処方をさらに大胆に応用し、婦人科のさまざまな疾患に活用している。たとえば湿熱下注を伴う肝鬱の青い帯下を、加味逍遙散（逍遙散から当帰・白朮を除き、茵蔯・山梔子・陳皮を加える）で治療している。また肝鬱火旺による血崩には、止血湯（逍遙散から茯苓を除き、生地黄・牡丹皮・參三七・黒荊芥を加える）で平肝解鬱している。

行気解鬱方のうち婦人科で常用されるのは、朱丹溪の越鞠丸（香附子・蒼朮・川芎・神曲・山梔子）である。処方中の香附子は、行気して鬱を除き、蒼朮は湿を乾燥させて湿鬱を除き、川芎は活血して血鬱をめぐらせ、神曲は積を消去して食鬱を除き、山梔子は清熱して火鬱を除く。気がめぐり湿が除かれれば、痰は自然に消滅する。これがいわゆる六鬱を統治するという方法である。逍遙散は、平性で潤す作用があり、肝が虚して気の伸びやかさが失われ、脾土もまた弱っている症状に適応するのに対し、越鞠丸は効果が強く燥性があるので、気鬱の実証に適応する。

気滞によって引き起こされた月経時の脇部の脹りや腹痛、あるいは腹部に痙聚・疼痛がみられる症状には、『韓医道』の青帯丸（香附子・烏薬）を主方とする。薬味は2味だけだが、この病機に非常にマッチしており、香附子によって行気解鬱し、烏薬によって疼痛と脹満を消すことができる。この処方『串雅内編』にも取り上げられており、鈴医たちが女性のさまざまな疾病の治療に本方を使っているのは、女性に鬱が多いからであると述べられている。またこの2つの薬味は、気滞による月経痛の処方にも主薬として常用されている。たとえば劉河間の紺珠正気天香散も、この2味に陳皮・蘇葉・乾姜を加えたものである。『女科準繩』の加味烏薬散は、砂仁・木香・延胡索・甘草を加えたものである。また気滞による痙聚の治療には、この2味に鬱金・枳殼・当帰・青皮・木香・川芎などの薬味を加えたものを使うことが多い。この処方には、気鬱や脹満を消し、寛中して痛みを止める効果がある。

肝陰血虚の場合は、衝任が損傷されて血海が空虚になっているので、出血量が少なくなったり月経が遅れたりして、やがては無月経になることが多い。そこで治療は肝を補い月経を調整することを目標とし、四物湯を主薬とする。この処方は補いながらも滞らせず、調整しながらも強すぎないので、婦人科の常用方として活用されている。傳青主もこの処方を加減して、女性の月経や妊娠に関わるさまざまな疾患に応用している。たとえばこれに白朮・黒荊芥穂・山萸肉・川断・甘草などを加えたものを、加減四物湯と名づけている。この処方は、血虚で精が枯渇したために発生した月

経過多の治療に利用され、子母相生、乙癸同源（肝腎同源）の原則にのっとって養血滋水している。また白朮・牡丹皮・延胡索・甘草・柴胡を加えたものが加味四物湯であり、肝気の伸びやかさが失われ、血虚になって月経がきたりこなかつたり、痛んだり痛まなかつたりするものに対し、理血舒肝して月経を調える。川芎を除いて山萸肉を加えたものが養精種玉湯であり、血虚で水液が失われたために痩せ細り、不妊症になったものを治療する。薬味1味を変えただけで、補血填精し月経を調べて妊娠させやすくしている。また川芎を除き、牡丹皮・黄芩・沙参・黒荊芥穂を加えたものが、順経湯であり、月経前の腹痛や吐血を治療する。上昇し走り回る性質のある川芎を除き、涼血潤燥作用のある薬味を加えることによって、血を下降させて血海に戻し、代償性月経を治療する処方となっている。

月経前の乳房部の脹満に対する臨床経験

月経前の乳房部の脹満は、日常の診察においてよく目にする疾患であるが、歴代の婦人科書籍にはあまり取り上げられていない。その原因は、2つ考えられる。1つは、封建時代には乳房は隠すべき部分であり、脹満があっても恥ずかしくて言い出せなかったこと。もう1つは、この症状が月経前だけで月経が始まれば自然に消滅してしまうので、問題視されなかったことである。しかし実際には、この症状は心身の健康を損なうばかりでなく、出産にも影響を与えるので、注目しておく必要がある。

臨床の間では、この疾患の患者は不妊症を伴っていることが多い。しかし月経前の乳房部の脹満を治療するために来院する患者は少なく、不妊症のために訪れ、その問診過程で本症が発見される場合がほとんどである。そこでここでは、私がここ数年間記録してきた症例のうち、典型的な症例20例について分析してみよう。

1 症状分析

この疾患は、月経前に発生するものである。通常は3～7日前に発生するが、稀には月経後半月前後で発生するものもある。症状の消失は、月経が始まって1～2日目であるが、なかには月経が終わるまで消滅しない場合もある。そして、次の月経前には再び発作を繰り返すというように、非常に規則的で周期的である。

脹満の程度については、乳房部が脹るもの・乳頭が痛むもの・脹りにしこりを伴うもの・しこりと灼熱感を伴うものなどがある。このほか、ここにあげた症例では、腹脹や腰のだるさ・月経時の腹痛を伴うものが17例、納呆を伴うものが10例、胸悶するものが8例、小腹部の脇が引きつって痛むものが5例、性欲が減退するものが4例あった。また8例は婦人科検査を受け、卵管炎が3例、卵管閉塞が1例、子宮の発育不全が1例、子宮の発育不全に卵管炎を伴うものが1例、子宮頸管炎、性神経麻痺が各1例発見されている。20例の患者のうちほとんどに妊娠経験がなく、不妊期間が2～5年のものが11例、6～10年が6例、11～13年が3例であった。

2 症状にもとづく臨床類型

1. 肝鬱脾虚型 (14例)	月経前の胸悶と乳房部の脹り・食欲不振・悪心・腹脹・小腹部が下垂して脹痛する・ときどき小腹部の両側が引きつれて痛む・脈弦細・舌質淡胖・苔薄白。
2. 肝鬱腎虧型 (3例)	月経前の胸悶と乳房部の脹り・腰がだるい・四肢に力が入らない・普段から性欲淡白・初潮は16～20歳・脈沈弦・舌質淡・苔少。

3. 肝鬱血虚型 (1例)	月経前の乳房部の脹り・頭昏・目眩・顔色が黄ばむ・精神疲労・月経が遅れる・出血量が少なく色が薄い・脈細弦・舌質絳・苔少。
4. 肝鬱衝任虚寒型 (1例)	月経前の乳房部の脹り・腰がだるい・精神疲労・小腹部の冷え・脈細遅・舌質淡・苔薄白。
5. 肝鬱火旺型 (1例)	月経前の胸悶と乳房部の脹り・口の渇き・内熱・小腹部の疼痛・小腹部の両側の脹痛・普段から濁った帯下がある・脈弦やや数・舌質淡紅・苔薄黄。

3 治療

治療法は、行気開鬱・健脾和胃が中心になり、香附子・合歡皮・蘇羅子・路路通各9g、広鬱金・焦白朮・炒烏薬・陳皮各3g、炒枳殼3gを使用する。乳房部の脹りがひどい者には、青橘葉・橘核を加える。乳房部が脹痛する者は、川楝子・蒲公英を加える。脹満部にしこりがある者は、王不留行・炮山甲を加える。脹りとしこりに灼熱感を伴う者は、海藻・昆布を加える。腎虚を伴う者は、杜仲・続断を加える。血虚を伴う者は、当帰・熟地黄を加える。衝任の虚寒を伴う者は、鹿角霜・肉桂を加える。火旺を伴う者は、黄柏・青蒿を加える。小腹部の両脇が引きつれて痛む者は、紅藤・白頭翁を加える。

4 治療行程

月経前胸悶と乳房部の脹りが現れたときから、月経が始まって脹痛が消失するまで服用を続け、これを1クールとする。3,4クール続けると、効果が現れる。

5 臨床効果の観察

20例中、治療回数が最も少ないもので3回、最も多いもので41回であり、一般には10回前後のものが多かった。うち治療後全快し妊娠したものが13例、症状が好転したが妊娠までには至らなかったものが6例、効果がなかったものが1例であった。また肝鬱脾虚型14例のうちで、全快が11例（そのうち10例が妊娠した）であり、3例が好転した。肝鬱腎虧型3例は、2例が好転し、1例は無効であった。そのほかの3つのタイプの各1例は、いずれも全快し、妊娠した。

6 症例

■ 症例1 ■

患者：賈〇〇，30歳

主 訴：結婚後1女をもうけたが、その後現在に至るまで12年間妊娠していない。子宮炎を患ったことがあるが、今は治癒している。現在月経周期は正常だが、月経前に乳房部の脹痛・胸悶・食欲不振があり、普段から空腹時に胸焼けがある。また月経が始まってからも乳房部の脹痛がある。脈細弦・苔薄黄。西洋医からは、卵管閉塞と診断されている。

弁 証：肝鬱脾虚型の乳房部の脹満および不妊症。

処 方：

- 月経前、乳房部が脹ったとき：香附子・鬱金・当帰・白朮・枳殻・蘇羅子・路路通・橘核・烏薬・青橘葉・陳皮。
- 月経が始まり腹痛があるとき：原方から蘇羅子・路路通・橘葉核を除き、白芍・延胡索・淨乳没・木香を加える。

予 後：9回治療して、6カ月後妊娠した。

■ 症例2 ■

患者：程〇〇，30歳

主 訴：結婚して5年経つが、妊娠経験はない。月経周期は一定せず、月経の1週間前から乳房部が脹痛し、月経時には小腹部が脹痛する。普段から濁った帯下があり、ときどき小腹部の両側に鈍痛があり、月経時にはさらに引きつったような痛みになる。ほかに口渴・内熱・胸悶・腰がだるい・脈細数・苔薄黄などの症状がある。

弁 証：肝鬱火旺型の乳房部脹満および不妊症。

処 方：

- 月経前乳房が脹ったとき：香附子・鬱金・当帰・蘇羅子・路路通・橘葉核・白朮・紅藤・枳殻・柴胡・陳皮。
- 普段、小腹部の両側に鈍痛があり、黄色く生臭い帯下があるとき：白朮・茯苓・陳皮・樗白皮・白槿花・川黄柏・紅藤・白頭翁・淮山薬・山萸肉・白果。

予 後：8回続けて治療したところ、1年半後に妊娠し、月が満ちて出産した。

■ 症例3 ■

患者：馬〇〇，35歳

主 訴：結婚して8年になるが、妊娠経験はない。月経は遅れがちであり、月経前に乳房部が脹痛し、月経時には小腹部が冷えて痛む。普段は、性欲が淡白である・帯下が止まらない・腰がだるい・精神疲労・脈細遅・苔薄白などの症状がある。

弁 証：肝鬱・衝任虚寒型の乳房部の脹満および不妊症。

処 方：

- 月経前乳房部が脹ったとき：香附子・鬱金・橘葉核・白朮・陳皮・合歡皮・枳殻・烏薬・鹿角霜・陳葉。
- 月経が終わって10～20日の間：鹿角霜・肉桂・巴戟天・仙靈脾・当帰・川芎・白芍・杜仲・川断・阿膠。